

本校の第三代校長である沢柳政太郎先生は、「吾は人間をして人間たらしむるの任を負う者なり」とおっしゃっておられます。人間から生まれる人間は、人間よって丁寧で育てられてはじめて人間になっていくのです。(猫は人間に育てられても猫の習性は失いませぬが、人間が他の動物に育てられたらどうなるでしょう。)

そして、私はこの私に生まれました。そのこと自体も奇跡のようなことです。筑波大学の村上和雄名誉教授によると、一組の父と母の遺伝子から生まれる子供は約七〇兆通りの可能性があるそうです。つまり私は、両親から七〇兆分の一の確率で生まれたのです。この折角の、現に人間として私として、この時代のこの環境の中に生を受けた私は、そのことの意義をしっかりと認識した上で、与えられた能力資質を最大限開花させねばなりません。

本校の教育は、かつては「全人教育」という言葉で表現されることが多かったのですが、現在は親鸞聖人の著作より「樹心」の語で表しています。その「樹心」を、「人と成る」また「To Be Human」と言い換えています。つまり、「人間に成り続ける。人間であり続ける」ことです。現代社会は、人間が人間であることが困難であるような、いわば「非人間化の世界」へ向かっていて、それはもうかなり進んできたようです。その中で、どこまでも「人間に成り続け、人間であり続けようとする人間」を育てたいのです。

そこで、本校の教育が目指す「人間」を少し考えてみたいと思います。

まとめていえば人間性豊かな人間です。共感性が高く、思いやりがある。知徳体、あるしは知情意円満な人です。そして自覚的な人間です。振り返る人。常に自己を厳しく見つめ、自己を偽らない。私たちはつい、自分に言い訳しながら進んでいきます。

そして、つながりを大事にしながら共に生きる人です。挨拶に始まり、コミュニケーションがとれる。他者を認め、尊重していく人。さらに環境(場)を大切にします。私たちの活動や成長を黙って包み支えている場に対して敬意を払う。きちんと後片付けをし、丁寧に清掃する。その前に汚さない、乱暴に扱わない。講堂の入退室には一札をします。

当然ながら考える人であり知恵の出せる人。そのためには正しい知識をしっかりと持たなければなりません。あるいは正しい解法や技術、検索方法などにも必要になります。そして知識を重ね合わせて自分の知恵として、ものを見、把握し、判断し、意志を働かせ、言葉で表現したり、行動に移していきます。その際に、利害損得や好き嫌い、また不快なことでなく、「真理を尊重する」態度が大事です。さらにバランスのある人。仏教の教えで言えば「中道」で、極端に偏らない進み方です。私たちは、往々にして二つに分けて、プラス(都合の良い)を取ってマイナス(不都合)を捨てますが、一見マイナスに見える中に学ぶべき多くのことがあります。

本校にはその教育を表す校歌が二つあります。まず北原白秋が昭和三年に作詞したものです。そして本校の創立九〇周年を記念して、白秋を尊敬していた詩人大木惇夫による校歌が生まれました。校訓をもとにして本校の教育を表現しています。一番から四番まで、いずれも「よき世の人となるために」とあり、そしてそれぞれ「こよなき真理を尊びて菩提樹の陰を慕わん」「互いに敬い愛しみ若人の旗をかざさん」「務めを果たして後にこそ幸いの華を享けばや」「不断に道を修めつつみ教えの智慧に添わばや」です。それぞれから伺えるものがあると思います。意識してしっかりと覚え、歌って欲しいものです。

本校教育の基本理念を「樹心」の語で表します。「心」は生きていく上で一番中心になるもの、中心にあつて全体を支えているものです。「樹」は樹立、揺るぎなく立つことです。樹木が揺るぎなく立つためには、大地との堅固な支え合いというか確実な関係が必要です。自分を黙って支えている世界（大地）への大きな信頼と安心の上に、自分自身への安心をもって自立独立していく様を、「樹心」の語は示しています。

つまり、自分として自立し独立するということは、他の一切との関係の上に成り立つのです。相互の関係の中で、自分の存在が他を支え、他が自分を支えして、成り立っているのですから、自立と共存は同時であります。

私は私として生きていきたい。しかし現実には、他人の目におびえ、目の前の人（特に怖い人やすぐ不快感を出す人）の好みと嫌いを察知して、受け入れてくれる姿を演技してしまふ。或いは、わがまま勝手に突っ張って、まわりの人から遠ざけられていく。いずれも、自分で納得できる自分ではありません。そのうちに、そんな自分を嫌いになっていきます。本当は自分は何をしたのか、他者とどんな関係でありたいのか、どんなふうに住たいのか、自分が分からなくなっていくてしまいます。すると、何となく元気が出ません。気持ちは沈み込み、生きていく意味も感じられず、空虚感に浸ってしまいます。

自分は自分として生きるのだと、自分を愛し、自分を尊び、自分で自分を律し、自発的に動こうとし、自信を持って孤独にも耐えられる。そういう自分を確立することが大事です。自分を好きになりましょう。その上で、自分自身への信頼感をもって、自分を内から支える願いに耳を傾け、生きるのです。不都合を他のせいにならず、自分のできる事を尽くしていきましょう。

そして、他者と共に生きていく。「共に」というのは、単なる仲間意識で仲良く生きるということではありません。強い仲間意識は、仲間はずれを生み、他者を疎外しかねません。思い通りにならないことばかりの、この世界から逃げないことです。辛くても嫌な人とも共に生きていく。その人は、私の人生で意味のある人に違いありません。そうしながら、出会い与えられる現実を引き受けていくのです。

私たち一人ひとりには、例外なく誕生の瞬間が与えられました。この私は、家族親族は勿論、ご縁ある様々の人から（きつと亡き人からも）、願われて生まれて生まれてきました。多くの人が喜び祝福する中に生まれてきました。生まれたその瞬間、本当に多くの人に喜びや安心や、つまり幸福感を、この私が与えたということを、きちんと認識すべきです。そしてそれ以後も、私を守るためなら、自らの命を差し出す事もいとわない親が、すぐそばで私に愛情を注ぎつつ、私を育ててくれました。粗末にできない私です。今も、この私は守られ認められているという、大きな安心感に立ちましよう。

私たちの生きるこの世は不如意です。つまり、私の思い通りにはなりません。起こっている現象のすべては、無数無量の要素・条件によって仮にそうなっているのですから。天候をはじめ自然の営みは全く私たちの知恵やはたらきを超えたものであることは、日常的にも経験する通りです。私の期待を裏切り、うまくいかないことが圧倒的に多くあります。私たちは全能どころか、非力で弱い、そういうものです。しかし時に、うまくいく時もあります。その時、喜びを感じ、まわりの様々に感謝の気持ちがかかります。

そして、うまくいくためには、一人でもがいてもできません。他者を信頼して、協力して事に当たる時、手応えのある成果が得られるでしょう。異なる資質の一人ひとりが集まると、相乗的に大きな力となります。何かができた時、たとえ直接関わったのが自分一人であったとしても、実は多くの支えの上のことであったと気づかねばなりません。

本校の樹心の教育の願いを受けとめて、自らに安心し他を信頼して、いきいきと生きていってほしいと念じあげます。